

山梨県中巨摩郡八田村

# 野牛島・大塚遺跡

—一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う発掘調査報告書—

2003.3

山梨県教育委員会  
国土交通省甲府工事事務所

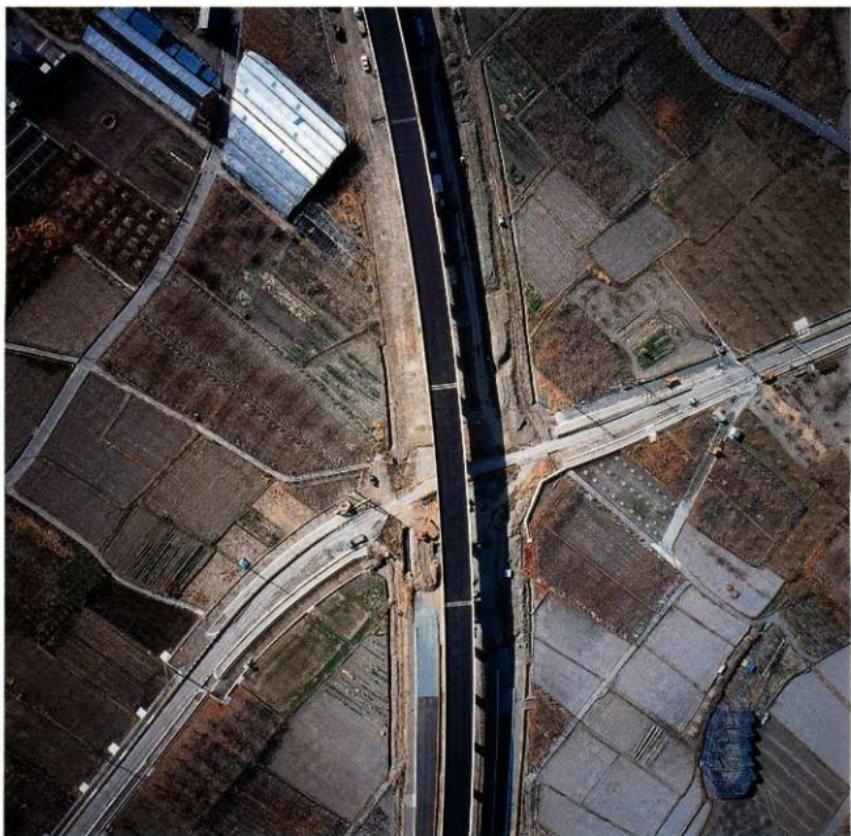
山梨県中巨摩郡八田村

# 野牛島・大塚遺跡

—一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う発掘調査報告書—

2003. 3

山梨県教育委員会  
国土交通省甲府工事事務所



野牛島・大塚遺跡全景

# 序

本書は、山梨県埋蔵文化財センターが平成13年度に発掘調査を実施した、山梨県中巨摩郡八田村野牛島地内に位置する野牛島・大塚遺跡の発掘調査報告書であります。この調査は国土交通省甲府工事事務所による一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴うものであります。

遺跡の周辺は、すでに中部横断自動車道・一般国道52号（甲西道路）改築事業が進み、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査も八田村地内では、仲田遺跡・石橋北屋敷遺跡・立石下遺跡と3カ所で行われました。これらの遺跡からは、古くは弥生時代の磨製石器の出土があり、奈良・平安時代の集落跡、中世に属する多くの遺構・遺物が発見されています。また近隣では、平成3年度の大塚遺跡や平成11年度の八田村教育委員会による野牛島・大塚遺跡の発掘調査なども行われております。

遺跡が位置する八田村は御勅使川の氾濫原であり、調査区の中央は厚い砂利層に覆われていました。今回の調査では、隣接する立石下遺跡と石橋北屋敷遺跡を挟んだ両側を帯状に調査したものです。両遺跡から検出された遺構の続きや集落の広がりが確認されました。面積的には狭いものでしたが、重要な成果を加えられたといえます。

末筆ながら、種々のご協力を賜りました関係機関各位、地元の方々並びに発掘調査と整理作業に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

2003年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

## 例　　言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡八田村野牛島地内に所在する野牛島・大塚遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が国土交通省より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
3. 本年度の調査区の名称については、本来ならA・B区は立石下遺跡、C・D区は石橋北屋敷遺跡に並行する部分であるため、両遺跡に伴った名称を使用するべきではあるが、工事の事業名称に従い「野牛島・大塚遺跡」という名称を使用する事とした。なお、平成11年度に八田村教育委員会で調査した「野牛島・大塚遺跡」は本調査区と直交する位置関係にある。
4. 本書の編集は、笠原みゆき・窟田昌彦（山梨県埋蔵文化財センター主任文化財主事）が行った。なお、執筆分担は以下のとおりである。  
第1・2章 窪田昌彦  
第3・4章 笠原みゆき
5. 遺物の写真撮影は、出月洋文（山梨県埋蔵文化財センター副主幹文化財主事）がおこなった。
6. 資料の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
7. 本報告書に係る出土品および写真、記録図面等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

## 凡　　例

1. 遺構挿図のスクリントーンは焼土の広がりを示す。
2. 遺物実測図の断面塗りつぶしは須恵器を表現している。
3. 遺構および遺物写真の縮尺は統一されていない。

# 目 次

## 序

### 例言・凡例

第1章 調査の経緯と概要 .....	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 発掘調査の概要	
第3節 調査体制	
第2章 八田村の地理的・歴史的環境 .....	2
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境と周辺の遺跡	
第3章 発見された遺構と遺物 .....	7
第4章 まとめ .....	9
付録 野牛島・大塚遺跡の自然科学分析 .....	13

## 表・挿図・図版目次

### 表-1 八田村内遺跡地名表

第1図 発掘調査区全体図	
第2図 周辺の遺跡位置図	
第3図 遺構-1	
第4図 遺構-2	
第5図 遺物	
図版1 A区・B-1区	
図版2 B-2区・B-3区・C区	
図版3 C区・D区	
図版4 A区・B区・C区出土遺物	

# 第1章 調査の経緯と概要

## 第1節 調査に至る経緯

本遺跡のある八田村野牛島地域は、一般国道52号（甲西道路）改築及び中部横断自動車道・双葉工事区（双葉～白根間）の建設工事が行われるのに先立ち、すでに発掘調査が行われている。山梨県埋蔵文化財センターが平成9・10年度には石橋北屋敷遺跡、平成11年度には立石下遺跡と仲田遺跡の発掘調査を行っている。また、平成12年には、一般国道52号（甲西道路）に接続する八田村道163号線のボトルネック解消事業に関わる調査として八田村教育委員会が野牛島・大塚遺跡の発掘調査を行っている。

今回の調査は、野牛島地内的一般国道52号線と八田村道163号線が十字に交わる交差点付近で、一般国道52号（甲西道路）の拡幅工事が必要となり、そのため、その交差点の四隅において追加調査を行うものである。遺跡の名称は、この場所は過去に調査が行われた石橋北屋敷遺跡、立石下遺跡、野牛島・大塚遺跡と隣接している地点であるため、その中の一つである野牛島・大塚遺跡と呼ぶこととした。

発掘調査は、平成13年11月6日～12月12日の約1ヶ月間にわたって実施し、基礎的整理作業は平成14年1月10日～3月26日、本格的整理作業は平成14年6月5日～平成14年8月31日までの約3ヶ月間かけて実施された。なお、文化財保護法に基づく手続きは以下の通りである。

平成13年11月 文化財保護法第58条の2に基づく「発掘通知」を山梨県教育委員会教育長に提出

平成13年12月 埋蔵文化財発見届を甲府警察署長あてに提出

## 第2節 発掘調査の概要

野牛島・大塚遺跡の今回の調査では、すでに調査を完了している石橋北屋敷遺跡と立石下遺跡に平行した4地点を調査した。この4地点をA～D区とそれぞれ呼ぶこととした。調査の範囲は、幅約1.5m・深さ約1～1.8m、長さは20m～80mの帯状の区域であった。調査は、A・B・D・C区の順におこなった。

A区では、溝1条とPitが確認され、この溝は平安時代の溝と見られる。遺物は弥生土器片が数点出土している。B区では、溝が1条確認されている。これは、江戸時代以降の溝と考えられる。C区では、住居跡1軒と溝条遺構1条とPitが確認されている。住居跡は、平安時代のものである。D区では、遺構・遺物は確認できなかった。

それ以外では、小さな坑が数基と、数十点の遺物が発見されたのみであり、遺物は、遺構内から土師器の壊と須恵器の高壺の破片、調査区の一部で縄文土器片が出土している。

C区で発見された竪穴式住居跡は、石橋北屋敷遺跡の南側にあたり、遺跡の端部が南に広がる可能性をみることができた。

## 第3節 調査体制

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 主任文化財主事 笠原みゆき・主任文化財主事 齋藤昌彦

作業員および整理員

井上時男、大越すず子、小野嘉雄、神沢正孝、時田勲、野沢喜美、橋口久子、深沢真由美、藤井健太、望月忠（五十音順）

## 第2章 八田村の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

野牛島・大塚遺跡の所在する山梨県中巨摩郡八田村は、甲府盆地の西端に位置している。北側には御動使川が流れ、韮崎市と双葉町との境界となっている。また、東側には釜無川が南流しており、竜王町と双葉町との境となっている。村の南西方面は、白根町が隣接している。村域は、東西約4km・南北約3.5kmでL字型をしており、総面積は8.04km<sup>2</sup>の村である。山梨県の全市町村（64市町村）の中で63番目の大きさで、人口は、7,117人（平成14年5月現在）である。村の中央部を東西に県道竜王一芦安線が走り、県庁所在地である甲府市や隣接する竜王町・白根町と結んでいる。また、西部には、国道52号線が、東部には県道今諏訪一双葉線が南北に走り、北部の韮崎市・双葉町などを結んでいる。

明治8年（1875）に六科村・野牛島村・上高砂村の三村が合併し御影村となり、下高砂村・徳永村・櫻原村が田之岡村となった。昭和31年（1956）に、この御影村と田之岡村が合併し、八田村が成立している。村名は、現八田村付近にあったとされている「八田御牧」・「八田庄」に由来している。

県道竜王一芦安線の沿道には、昭和9年（1934）に運転免許センターが創設され、八田村成立後は、八田村役場・農協・中央公民館などの公共施設や、宮入バルブなどの工場が誘致された。甲府方面との交通の便利さからか人口も増えていった。

八田村では、明治中期以降、畑作地帯で養蚕が発達し、大正から昭和前期にかけて最盛期を迎えた。しかし、第2次世界大戦後には、養蚕は衰退してゆき、代わりに果樹園芸農業が発達ってきて、果樹園が増えた。現在では、ブドウ・桃・桜桃・すもも・梅・柿・キーワイなどが栽培されている。とくにキーワイの生産高は、県下第一で、キーワイを原料としたワインも醸造されている。また、冬の八ヶ岳氷を利用した枯露柿の生産も多く行われている。八田村が果樹の栽培に適しているとされている扇状地上に立地していることも、果樹栽培が盛んに行われている一因であろう。

八田村は、御動使川扇状地と釜無川氾濫原の上に発展した村である。村内の西半分は、御動使川扇状地、東半分は、釜無川氾濫原といえる。また、村の中央を一条の断崖が南北に走っており、これを御動使川扇状地側侵食崖と呼んでいる。これは、御動使川扇状地がその扇端を釜無川の氾濫によって欠きとられたためにできたものである。

野牛島・大塚遺跡が所在している野牛島地域は、北は北御動使川、南は前御動使川に挟まれている。また、東は釜無川に接しており、地域全体が川に囲まれ、「島」のような形になっている。これが海や湖のない地域に「島」の名がついている由来の一つと考えられている。

### 第2節 歴史的環境と周辺の遺跡

八田村の名の由来は、約750年ほど前に存在が明らかになっている「八田御牧」や平安時代から鎌倉時代にかけて存在していた「八田庄」などの名からきている。「八田庄」のあった「巨麻郡」の名は、高麗（朝鮮半島）国からの渡来人が住み着いたからという説と、奈良時代より貢馬として中央に収めるほどの良馬の産地であったことから、「駒」から名づけられたという説がある。「八田御牧」の存在は、この後者の説にそったものであり、「牧」の存在を裏付けるものとなっている。

地理的環境でも述べたように八田村は、御動使川扇状地と釜無川氾濫原の上に広がった集落であり、水との戦いが長く続かれた地域である。約400年ほど前の武田信玄の時代に、「信玄堤」を代表とする治水工事が始まっている。八田村西部の六科に将棋の頭のような楔形をした「将棋頭」というものを造り、御動使川を二つの流れに分けた。水量の少ないときは、主に新しく造った北御動使川を水は流れているが、水量が多くなると、「将棋頭」で分けられた從来の御動使川である前御動使川にも水が流れるようと考えられた。これによ



って、一つの道で流れていた水を二つの道で流すことにより、氾濫し暴れる川を治めたのである。北御勅使川を流れる水は、龍岡台地の南端を開削した「堀切」を通り、釜無川との合流地点に置かれた「十六石」によって対岸の「高岩」にぶつけられることになり、水流を弱めようと考えられた。前御勅使川は、再び氾濫原に小扇状地を造ってはいるが、明治の頃には磨河川となり、現在は、自動車試験場の南側に面影を残すに過ぎない。要するに、現在の御勅使川は、戦国時代以降に流路が開かれた川である。

近年の八田村村内の遺跡調査では、野牛島地域の調査が多く行われている。平成7年の大塚遺跡（2）の調査では、古墳時代前期から奈良・平安時代の住居が30件以上確認され、古くから集落が形成されていたことがわかった。御勅使川扇状地の中心部には遺跡が少ないといわれてきたが、それをくつがえす発見であった。扇状地上での水田耕作も確認されており、そこから内耳土器片、陶器片が検出され、水路と見られる溝状遺構も検出された。その他にも平成9・10年におこなわれた石橋北屋敷遺跡（3）では、中・近世の掘立柱建物跡や、鎌倉・室町時代の道路構造、戦国時代の区画溝などが検出されている。平成11年に行われた立石下遺跡（4）では、平安時代の集落跡・溝状遺構、炭窯跡が検出され、県内では2例目となる小壺片の奈良三彩が出土している。同年に行われた仲田遺跡（5）では、水田跡が発見され、畔・足跡・道などが検出された。平成12年に八田村教育委員会によって行われた野牛島・大塚遺跡の調査では、奈良・平安時代の住居跡・溝跡・烟状遺構などが発見され、扇状地で生きる人々の生活を考える上で重要な資料を得ることとなった。また、仲田遺跡の北側には赤山遺跡（6）があり、古くから縄文時代の石器や土器片が採取される遺跡として古くから知られている。

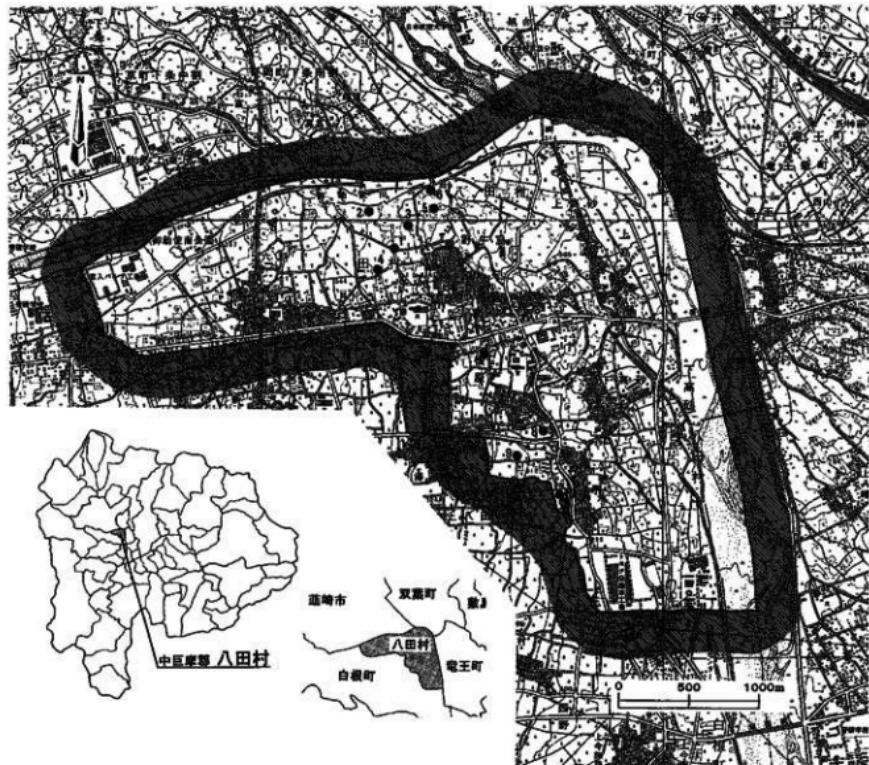
野牛島地域の南に位置している榎原・徳永地域にある榎原・天神遺跡（7）では、平安時代の住居址や中世の柱跡などが検出されている。舞台遺跡（8）・坂ノ上姥神遺跡（9）では、平安時代の遺物を採取することができる。徳永・御崎遺跡（10）では、平安時代の遺物のほか、縄文時代後期の遺物が採取されている。また、先に述べたように、八田村村内には長い治水の歴史があり、御勅使川堤防跡群・前御勅使川堤防跡群・釜無川堤防跡群が存在している。その中のほとんどが「かすみ堤」と呼ばれる雁行堤であり、途切れ途切れになつた堤防をだぶらせながら何本も配列し、水勢を弱める方法である。

#### 参考文献

- 山梨県教育委員会ほか 『大塚遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第137集 1997
- 山梨県教育委員会ほか 『石橋北屋敷遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第178集 2000
- 山梨県教育委員会ほか 『仲田遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第187集 2001
- 山梨県教育委員会ほか 『立石下遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第189集 2001
- 山梨県教育委員会ほか 『巻番下堤跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第190集 2001
- 八田村教育委員会 『山梨県中巨摩郡八田村 村内遺跡詳細分布調査報告書』 八田村文化財調査報告書第1集 2000
- 八田村教育委員会ほか 『山梨県中巨摩郡八田村 野牛島・大塚遺跡』 八田村文化財調査報告書第2集 2000
- 山梨県教育委員会 『山梨県遺跡地名表』 1979
- 八田村 『八田村誌』 1972

表一 八田村内遺跡地名表（「山梨県中巨摩郡八田村 村内遺跡詳細分布調査報告書」より）

No	遺跡名	種別	所在地	時期
1	野牛島・大塚遺跡	集落	野牛島3047-3外	奈良・平安
2	大塚遺跡	集落	野牛島3173-1外	縄文・古墳・奈良・平安
3	石橋北屋敷遺跡	集落	野牛島2744外	縄文・古墳～中世
4	立石下遺跡	集落	野牛島2580外	縄文～中世
5	仲田遺跡	水田	野牛島2804外	中世・近世
6	赤山遺跡	散布地	野牛島2821外	縄文
7	櫻原・天神遺跡	集落	櫻原800外	古墳・平安
8	舞台遺跡	集落	徳永1921外	平安
9	坂ノ上姥神遺跡	散布地	徳永1845外	平安
10	徳永・御崎遺跡	散布地	徳永1666外	縄文・平安
11	御勒使川堤防跡群	堤防		中世・近世
12	前御勒使川堤防跡群	堤防		中世・近世
13	釜無川堤防跡群	堤防		中世・近世



第2図 周辺の遺跡位置図

## 第3章 発見された遺構と遺物

本調査区では、中部横断自動車道と一般国道52号（甲西道路）と村道163号線の交差点付近の四隅を幅1～2m・長さ数十mにわたって調査したものである。1つ1つの調査区が離れてしまったため、それぞれ、立石下遺跡の北西側に沿った区をA区、南東側に沿った区をB区、石橋北屋敷遺跡の南東側に沿った区をC区、北東側に沿った区をD区と名付けた。また、B区については、立石下遺跡に並行する調査区（B-1区）の他に、八田村教育委員会で平成11年に調査された野牛島・大塚遺跡に隣接する村道に近い部分を2カ所調査しており、西側をB-2区、東側をB-3区とした。

### A区の遺構と遺物

A区は、幅約1m・長さ約127m・深さ約1.5mの長細い帯状の調査区である。遺構は溝が1条・Pit3基が検出された。遺構が検出されたのは、立石下遺跡の1区に並行する部分だけで、立石下遺跡から石橋北屋敷遺跡の間にあたる部分では、1mほど掘ると砂利層となる。この砂利層を部分的に3mほど深掘りしたところ、粘土と砂が交互に堆積する様子が窺え、その隙間から湧水があった。調査区の西側約53mのあたりから東側は、疊層が広がり始める。この疊層は御動使川の旧河川であろう。

1号溝は、幅約1～0.6m、長さ約2m、深さ約25cmを測る。遺物は、土器部品が出土しているが時期は明確にはできなかった。この溝は、立石下遺跡1区で検出された5号溝の続きと推定できる。

1号Pitは、直径約20cm・深さ約20cm、2号Pitは、直径約8cm・深さ約10cm、4号Pitは直径約25cm・深さ約22cmを測る。Pit内から出土した遺物は無い。遺物はPitが検出された周辺部分から、条痕が施された弥生土器片が数点検出されているのみである。

### B区の遺構と遺物

B区は、立石下遺跡に並行するB-1区（幅約1.5～1.8m・長さ約36.5m・深さ約1.5m）と、村道部分の方形部分B-3区（調査対象区は一辺約5mであるが、実際の発掘面積は約3m四方・深さ約1.3mである）、その間にB-2区（幅0.8m・長さ5.5m・深さ約1m）の3カ所を調査した。B-1区は砂利層が確認されなかつたので、他の区より深く掘り下げてみたが、遺構は確認されず、遺物は摩耗が激しい小さな破片が数点出土しただけであった。調査区西壁から3mほど東に戻った部分の土層をみると、地表から60cmほど掘り下げたところから20～40cmほどの厚さで暗い黄褐色粘質土が堆積しており、この層の下層から数少ない遺物が出土している。この層は遺構確認面でもあり、この層の上層は黒褐色土であった。B-2区は、深さ1mほどで砂利層が確認され、遺構・遺物も確認できなかつた。地表面は畑地への撤入路として使われていたせいか、堅く締まつて重機のバケットの爪が突き刺さらない状態であった。また、埋め立てても行われていたようで、堆積も安定していない。B-3区は村道163号線下で、比較的の交通量の多い路線であるため、短時間の調査が求められた。地表面から30cm下から1段階前の舗装面が確認された。南壁は舗装に対応する縁石が深さ約1mほどで埋められていた。この縁石があることと、縁石のさらに南側には配管が埋設されていることから、調査を行うことはできなかつた。さらに、約20cmほど掘り下げると、もう一段、古い縁石が北側の壁より内側から検出された。この縁石に対応する道路はアスファルト舗装ではない。この2段階のコンクリートの縁石の内側を調査するのみであったが、砂と砂利の入り交じった複雑な堆積をしており、何度も流水による堆積があったことが推定できる。最終的に1.3mほど掘り下げると、帯状の暗褐色土が東西方向に延びていた。この溝条遺構は幅約1m・長さ約2.8mで、確認面からの深さは約50cmほどであるが、実際はさらに上層から掘りこまれていたものと推定する。溝中の堆積は砂利と粘土質の土壤が混在し、遺物は磁器片が数点確認されている。時期的には明治時代頃のものであろう。道路部分の改修が何度も行われているようである。また、薄い砂利の堆積が重なりあってい

るよう観察できるため、この溝状遺構も河川の氾濫時に形成された流路の一つかもしれない。

#### C区の遺構と遺物

C区は石橋北壁敷遺跡に並行する長さ約79m・幅約1.5~5.5m・深さ約1~1.8mの調査区である。途中、烟境の側溝によって分断されている。A~D区全体で唯一の住居跡が確認された。また、Pit11基と細かい炭化材が覆土中に分布する溝状遺構が1条確認できた。この他、数カ所で黒色土の落ち込みが確認されているが、遺構として認識できたものは前述以外はなかった。

1号住居跡は、北西の隅が北壁約1.9m・西壁約1.1m・深さ約30cmのみの調査であった。確認面から細かい炭化物が覆土中に広がっている状態で、掘り進めていくうち北西の隅から北壁全面にかけて大きめの炭化材が出土した。しかし、形状の判断ができるほど残存状態の良いものはなかった。また、北壁から25cmほど内側には焼土が25cm×50cmの楕円形に広がっていた。その西側60cmの位置から須恵器高杯と土師器甕片が出土した。床面から10cmほど上からの出土であった。北西隅から検出された炭化材で放射性炭素年代測定した結果、約1500年前の年代を示した。しかし、出土している遺物と時期差が生じている。

1号溝は1号住居跡より6m西側に位置し、幅約1m・長さ約1.1m・深さ約20cmを測る。炭化材以外の遺物は確認できなかったが、覆土中に細かい炭化材を多く含んでいた。この炭化材を含む土壤を放射性炭素年代測定にかけたところ、約1900年前という結果を得た。

Pitは11基確認でき、1号Pitから順に大きさを示す。1号Pitは、長軸50cm・短軸30cm・深さ15cmほどの楕円形である。2号Pitは、長軸50cm以上・短軸35cm・深さ10cmほどの楕円形である。一部は壁中である。3号Pitは、直径約45cm程度・深さ14cmほどの円形である。4号Pitは、直径約30cm・深さ約12cmほどの円形である。5号Pitは、直径約35cm・深さ約20cm程度の円形と思われる。6号Pitは、直径約25cm・深さ10cm程度の円形と思われる。7号Pitは、直径約30cm・深さ約30cmの円形である。8号Pitは、直径約30cm・深さ約20cmの円形である。9号Pitは、直径約30cm・深さ約7cmほどの円形である。10号Pitは、直径約20cm・深さ約13cm程度の円形と思われる。11号Pitは、直径約20cm・深さ約5cm程度の円形と思われる。10・11号Pitは全体の一部が壁中である。

遺物は、1号住居内から須恵器高杯脚部片・土師器片が出土し、調査区の東側から須恵器甕の破片が出土している以外は摩耗が激しい小破片ばかり、数点が調査区全体で出土した。明確な遺構内出土遺物は1号住居跡出土の遺物のみで、とのものは包含層からの出土である。

#### D区の遺構と遺物

D区は、幅1.2m・長さ28.5m・深さ約1mの調査区である。烟境の縁石で3カ所に分断されている。調査区西側は烟の耕作による擾乱が深くまでおよんでいて、遺構・遺物などは確認できなかった。しかし、調査区東側の壁面を慎重に精査したところ、調査区の東側角隅に溝条の黒色土の落ち込みが確認できた。しかし、遺物が確認できず、明確な判断はできなかった。調査区全体でも遺物はほとんど出土していない。

## 第4章 まとめ

今回の野牛島・大塚遺跡は、調査区が狭く限られた範囲だったため、結果的に遺構・遺物の有無を確認する試掘的な状況の調査となった。この調査区は、平成11年に八田村教育委員会で行った野牛島・大塚遺跡に直行する位置関係にある。八田村教育委員会の調査区を挟んで東側には、山梨県埋蔵文化財センターで調査を行った石橋北屋敷遺跡（平成9・10年度調査）が、西側では立石下遺跡（平成11年度調査）が存在している。このように地名や由来によって、細かく遺跡名が付けられ分かれているが、本来は一つの集落の可能性も考えられている。

今回の調査では、立石下遺跡に沿った部分をA・B区、石橋北屋敷遺跡に沿った部分をC・D区として調査を行った。

その結果、A区では、Pit3基・溝1条が検出できた。Pitには規模も位置にも企画性は見られず、内容は不明である。しかし、溝については、立石下遺跡1区で確認された5号溝の延長と考えられ、出土した遺物から平安時代に属するといえる。この他、Pitの周辺では弥生時代の条痕が施紋された土器片が数点出土している。弥生時代の遺物は、立石下遺跡2区から弥生中期の遺物が出土していることから、同時期のものと考えられる。

B区はB-1区～B-3区と3ヶ所に分けて調査を行ったが、遺構が確認できたのは、B-3区のみで、近世以降の溝状遺構1条である。遺物は陶器片数点が出土した。

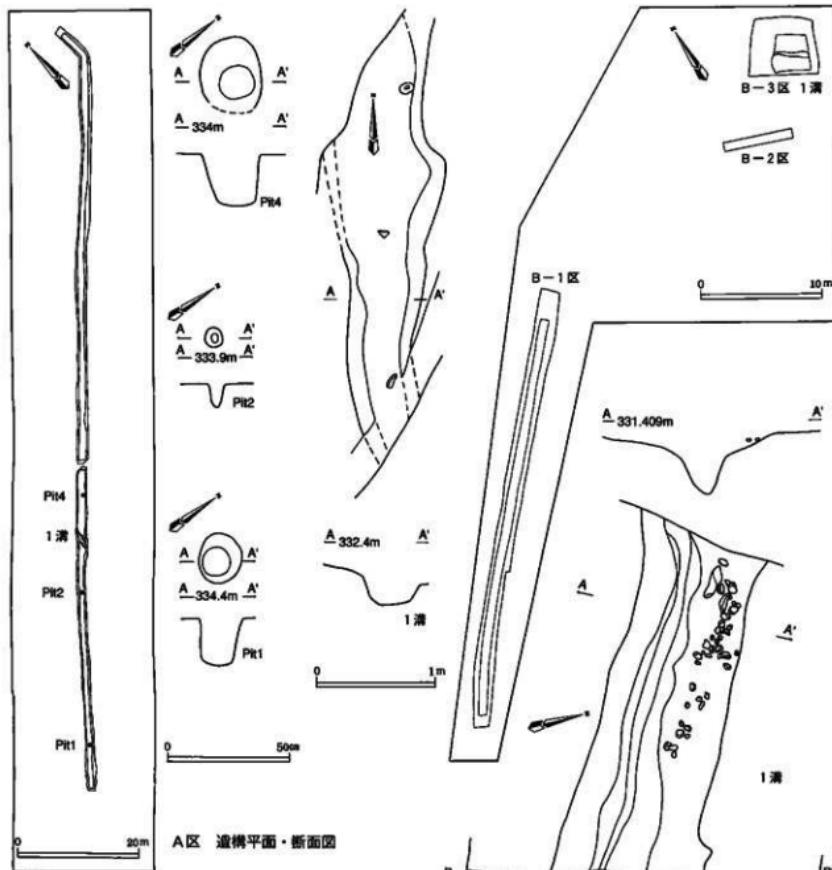
C区では、今回の調査で唯一、竪穴式住居跡が発見された。北西隅の一部であったが、須恵器・土師器が数点出土している。C区は石橋北屋敷遺跡3区の南側に位置していて、遺跡内の集落の広がりが南側にまだ広がることを示している。しかし、住居跡が発見された位置は、石橋北屋敷遺跡のなかでは、遺構密度の低い、しかも旧河川の砂利に覆われた部分に近くなっている。最も近い遺構は8世紀末の2号住居跡で、距離的には20mほどである。石橋北屋敷遺跡3区で発見された住居跡は8世紀末から9世紀にかけての時期のものが多い。今回調査した1号住居跡も、出土した須恵器高杯の特徴から同時期のものと考えている。同住居跡内から採取した炭化材の化学分析では、古墳時代の年代が導き出されたものもあったが再検討の必要がある。

D区では、御勅使川の旧河川の砂利層に覆われていて遺構・遺物とも確認できなかった。

A・D区は、御勅使川の旧河川の砂利に広範囲で覆われている状態であった。また、全体的にも調査区が4ヶ所に分かれていたことや、幅1mほどで帯状に長い状態であったことなどの制約から、遺跡としての性格の把握については断片的なものに止まるが、隣接する遺跡の周辺を補う結果が得られたことは最大の成果であったと思われる。

### 参考文献

- 小林健二 2000 「石橋北屋敷遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第178集  
斎藤秀樹 2000 「野牛島・大塚遺跡」 八田村文化財調査報告書第2集  
山本茂樹ほか 2001 「仲田遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第187集  
米田明訓ほか 2001 「立石下遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第189集



①ツアファシット  
新1面道路  
新2面道路

②ツアファル  
新3面道路

③ツアジヤリ  
新4面道路

④ツアジヤリ  
新5面道路

⑤底盤に石がある 第3面道路の下、底色化したり、赤色したりする土壌

⑥10YR2/3黒岩 直径30cmほどの石4つ かたい、さらさら、植物の根 (?) 深入 (左側)

⑦10YR3/3暗黒 岩直径30cmほどの石1つ かたい、さらさら

⑧10YR3/3にぶい 黄褐色 石はとんとんなし、1cmほどの石のみ かたい、さらさら

⑨10YR3/3にぶい 黄褐色 石質、石多い、1cm～5cmほどの石15% かたい、さらさら

⑩10YR3/3にぶい 黄褐色 3cmほどの石のみ かたい、さらさら

⑪10YR3/1黒岩 ～2cmほどの石の小粒 7% かたい、さらさら

⑫10YR3/2黒岩 2～3cmほどの石の小粒 5% かたい、さらさら

⑬10YR4/4暗 黑なし、こまかい砂 かたい、さらさら

⑭10YR4/4暗 黑なし、こまかい砂 1cm以下の石1% かたい、さらさら、遺物あり

⑮10YR3/1黒岩 ジヤリあり 1cm以下の石1% かたい、小石のためボロボロする

⑯10YR3/1 黑 1% ⑰2りびななし

⑰10YR3/1 黑 5cmほどの石1% かたい、さらさら

⑱10YR3/1にぶい 黄褐色 5cmほどの石1つ、5cm以下小石2% かたい、さらさら

⑲10YR3/1 黑 2cm以下Yシャリ、小石5% 小石はボロボロせず、水がにじんでいる?

⑳10YR2/2 黑 石なし、小粒のみ、やわらかめ、さらさら

㉑10YR2/2 黑岩 左側石なし、右側1～3cmほどの石30% 少しやわらかめ、ざらざら

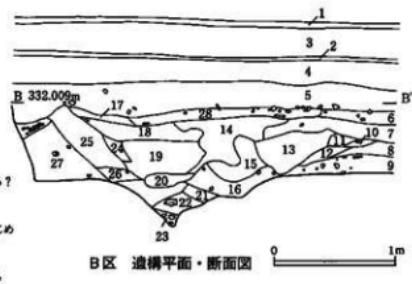
㉒10YR2/2 黑岩 1cm以下、小石5% やわらかめ、じめじめ、ボロボロする、遺物あり

㉓10YR2/3 黑岩 10cmほどの石1つ、5cmほどの石2つ、砂がこまかい、水がにじむ、じめじめ

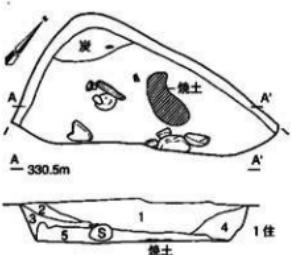
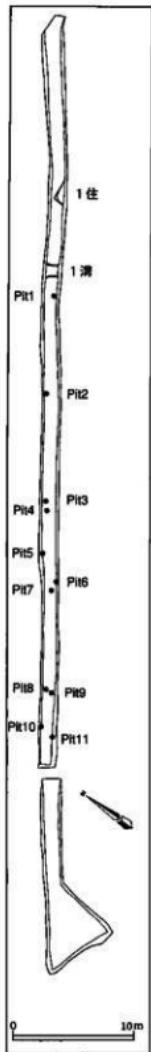
㉔10YR2/3 黑岩 10cmほどの石1つ、5cmほどの石2つ、砂がこまかい、水がにじむ、じめじめ

㉕10YR2/3 黑岩 5cmほどの小石、ほとんど砂、ざらざら、5cmほどの石、左上、かたい

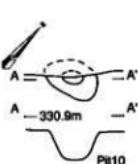
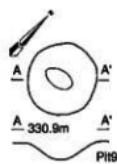
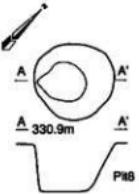
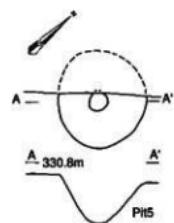
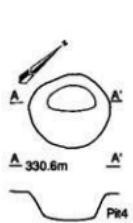
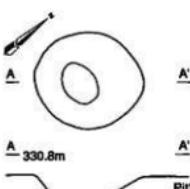
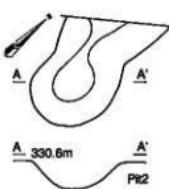
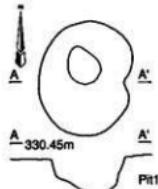
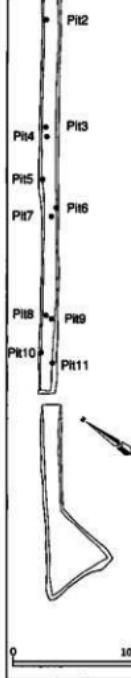
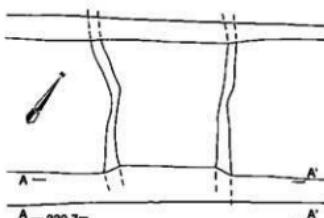
㉖10YR3/3 黑岩 右上の石、右はしコンクリート橋の下の鉄石の混入? かたい、さらさら



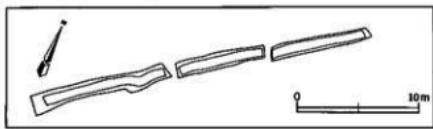
第3図 造構-1



- ①10YR3/3暗褐色土—繋り、粘性あり、黄褐色粘土がブロック状にまだらに入る。  
 ②10YR3/4暗褐色土—  
 ③10YR2/3黒褐色土—  
 ④10YR2/3暗褐色土—繋りあり、粘性あり。  
 ⑤10YR3/3暗褐色土—繋りあり、粘性あり。炭化物焼土粒子も含む。



C区 造構平面・断面図

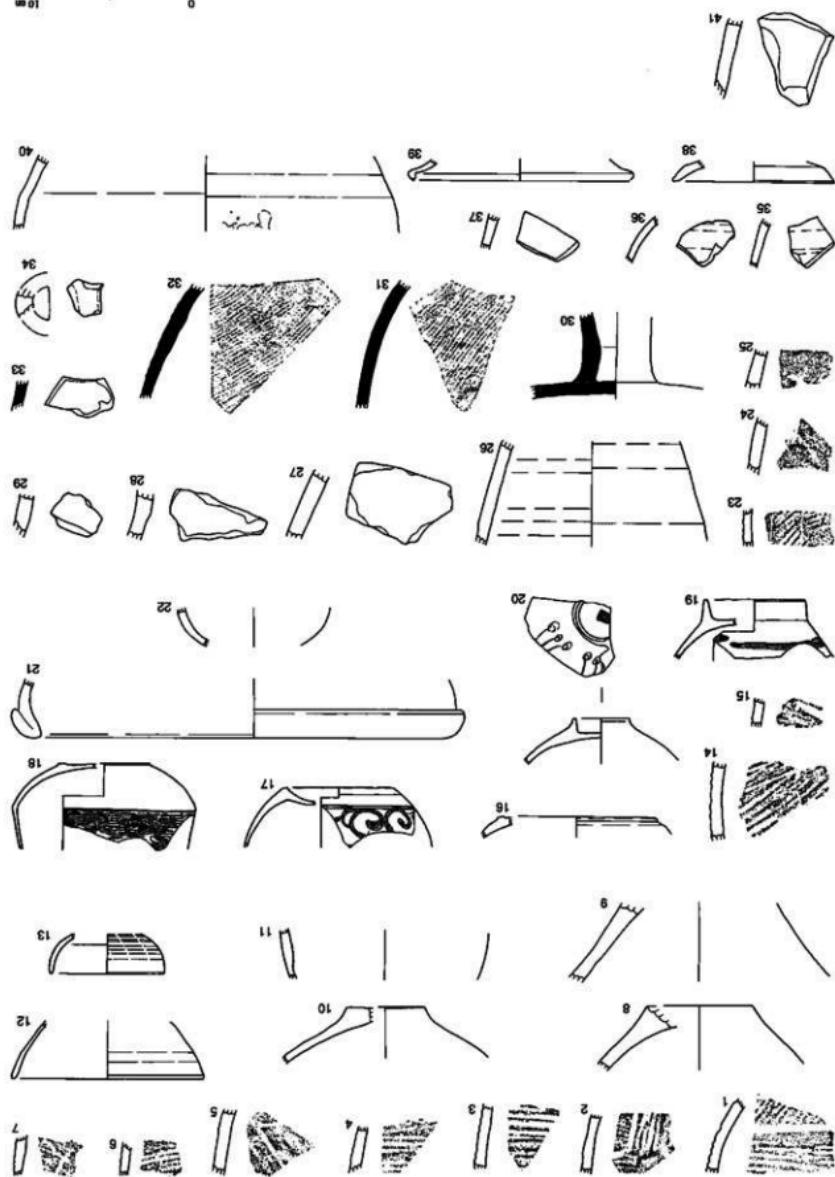


D区 平面図

第4図 造構-2

圖5 圖 遺物

10 mm



# 付編 野牛島・大塚遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

山梨県中巨摩郡八田村野牛島地内に所在する野牛島・大塚遺跡は、甲府盆地西部を流れる釜無川の支流である御勤使川の形成した扇状地（御勤使川扇状地）の扇尖部から扇端部付近に立地する。甲府盆地西部の地形学図（齊藤、1998）によれば、御勤使川扇状地は完新世（約1万年前以降）に形成された扇状地であり、その扇頂部には泥流堤が分布し、扇端部は段丘崖が形成されている。また、段丘崖下には、二次的に形成された小規模な扇状地が形成されている。

過去に行われた発掘調査では、奈良・平安時代の住居跡や土坑、溝状遺構、窓状遺構が検出され、土師器や須恵器、鉄製品などの遺物などが確認されている（斎藤、2000）。今回の発掘調査では、平安時代の所産とされる堅穴住居跡や溝状遺構、江戸時代以降の溝状遺構や土師器や須恵器などの遺物が確認されている。

本報告では、平安時代と想定されるとされる堅穴住居跡や溝状遺構を対象とし、これら遺構内より出土した炭化材について放射性炭素年代測定を実施し、年代に関する資料を得る。なお、関連資料として、年代測定を実施した試料および同遺構より出土した炭化材について樹種同定を実施する。

## 1. 試料

試料は、発掘調査区C区から検出された1号住居跡および1号溝から採取された炭化材および炭化物19点である。以下に、遺構および試料の概要を示す。

### ・1号住居跡

1号住居跡は、住居跡の約1/4が検出されており、住居跡床面からは須恵器片などの遺物や炭化材集中、焼土などが認められる。分析試料として採取された17点の炭化材は、床面や住居跡隅などに認められたものである。

### ・1号溝

1号溝は、1号住居跡の北西に位置し、幅約1m、深さ約20cmを測る。試料は、1号溝最下層炭化材包含層から採取された炭化物混じりの土壤3点である。

以上の試料のうち、放射性炭素年代測定は、1号住居跡北西隅の炭化材集中から出土した炭化材No2、および1号溝最下層炭化材包含層から採取された炭化物1点の計2点を対象に実施する。なお、上記の試料については、試料の量や出土位置等を考慮し選択を行ったが、いずれの試料も保存状態は良好ではなく、また土壤の付着が著しい。

樹種同定は、1号住居跡から採取された炭化材17点、放射性炭素年代測定試料である1号溝最下層炭化物包含層から採取した炭化物1点、さらに、D区最東端の溝状遺構から出土した炭化材1点の計19点である。

## 2. 分析方法

### (1)放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は株式会社加速器研究所の協力を得た。測定方法は、極めて試料が微量であった1号溝最下層炭化材包含層土壤より採取された炭化物については、加速器（AMS）による測定を行い、1号住居跡北西隅の炭化材集中から出土した炭化材No2については気体計数法による $\beta$ 線測定を行う。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,570年を使用した。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、加速器を用いて試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、標準試料PDB（白亜紀のペレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを

計算し、千分偏差（%；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

## (2)樹種同定

炭化材の樹種同定は、木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

## 3. 結果

試料の測定年代結果を表1に示す。各試料の測定年代値（補正年代値）は、1号住居跡の炭化材No2は1500年前、1号溝最下層炭化材包含層より採取された炭化物は約1900年前頃の年代を示した。

### 炭化材の樹種同定結果

結果を表2に示す。1号住居跡のNo2、No11、No12、No14、No15、および、大きな炭破片の6点が落葉広葉樹のヤマグワと同定された。

この他の炭化材は、い

ずれも保存状態が悪く種類の同定には至らなかった。同定に至らなかった試料については、同定できた範囲での結果（針葉樹・広葉樹の別）を記し、木材組織が全く観察できなかった試料については不明とした。以下に、ヤマグワの主な解剖学的特徴を記す。

・ヤマグワ (*Morus australis Poiret*) クワ科クワ属

環孔材で、孔眼部は1～5列、孔眼外への移行は緩やかで、晚材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に

表1 放射性炭素年代測定結果

試料名	樹種	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	補正年代 BP	Code. No.
1号溝炭化材	広葉樹	1890±30	-27.55±0.95	1870±30	IAAA-10957
1号住居跡No2	ヤマグワ	1490±30	-24.5	1500±30	IAA-142

(1)測定年代および補正年代は、1950年を基点に何年前であるかを示した値。

(2)誤差は、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代。

表2 樹種同定結果

地区名	遺構名	層位	試料名	樹種
C区	1号住居跡		No1	不明
			No2	
			No3	
			No7	不明
			No8	広葉樹
			No9	不明
			No10	広葉樹
			No11	ヤマグワ
			No12	ヤマグワ
			No13	広葉樹
			No14	ヤマグワ
			No15	ヤマグワ
			No19	不明（炭化材なし）
			大きな炭破片	ヤマグワ
			タヌキ掘り前の炭化材	不明
			タヌキ掘り部炭	広葉樹
			住居内スミ	不明
	1号溝	最下層（炭化材包含層）2		広葉樹（環孔材）
D区			最東端 溝?内	不明

複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

#### 4. 考察

##### (1)遺構の年代について

分析の結果、各試料の測定年代値（補正年代値）は、1号住居跡の炭化材No 2は約5世紀中頃、1号溝最下層炭化材包含層より採取された炭化物は約1世紀後半頃の年代を示した。今回、分析を実施した炭化材は、それぞれ遺構内の出土状況などから、遺構機能時あるいはそれに近い時期と判断される。しかし、これら試料の年代値は、特に、古墳時代頃の年代値を示す1号住居跡では、出土遺物など考古学成果から平安時代と想定されており、年代観についての所見が異なる。

この考古学的所見との相異については、暦年代と放射性炭素年代とのずれや試料の状態・由来を検討する必要がある。放射性炭素年代は、測定法自体が持つ誤差や、測定の前提条件である大気中の<sup>14</sup>Cの濃度が過去において一定ではなかったことなどから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。この問題については、年輪年代による暦年代既知の年輪の材について放射性炭素年代測定を実施することにより、暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線が作られている（Stuiver, M. et al., 1998）。この補正曲線によれば、1号住居跡の炭化材No 2は約100～150年程度、1号溝最下層炭化材包含層より採取された炭化物は約50年程、それぞれ放射性炭素年代は新しい暦年代に補正される。したがって、1号住居跡の炭化材No 2は6世紀中頃～8世紀、1号溝は2世紀頃の年代である可能性がある。

試料の状態や由来については、前述のように試料とした炭化材は土壌の付着が著しいことから、土壌腐植に由来する炭素分が吸着していることが推測される。今回の試料のように試料が少ないので、前処理の段階でこれらを完全に除去できず、試料本来の年代と異なる年代値を示す可能性もある。

##### (2)炭化材の樹種について

1号住居跡および1号溝跡から出土した炭化材で同定された樹種は、ヤマグワのみである。ヤマグワは、比較的重硬で強度が高い種類であり、住居構築材として適材と考えられる。したがって、1号住居跡で検出されたヤマグワは、出土状況等も考慮すると住居構築材の一部である可能性が考えられる。なお、本遺跡の近隣の百々遺跡でも、古代の住居跡から出土した炭化材にヤマグワが認められており（未公表）、ヤマグワは集落周辺の落葉広葉樹林に普通に見られる種類であることから、遺跡周囲で入手可能な木材の中から適材として選択・利用したことが推定される。

ところで、百々遺跡では、ヤマグワの利用のほか、針葉樹のヒノキ属やモミ属、広葉樹のコナラ節やクヌギ節を利用する住居跡なども認められているが、こうした木材利用の差異がどのような要因によるか現段階では言及できない。この点については、今後さらに遺跡周辺の植生および植物利用に関する分析調査や資料を蓄積し、住居跡規模や形態など考古学的成果を含めて検討したいと考えている。

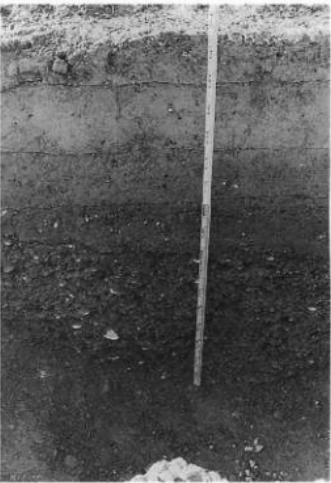
#### 引用文献

- 齊藤章治（1998）大学テキスト日本の扇状地、280p., 古今書院。  
Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) : INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0calBP.  
Radiocarbon, 40, p.1041-1083.  
斎藤秀樹（2000）八田村道163号線ボトルネック解消市町村道県代行事業の工事に伴う埋蔵文化財発掘  
調査報告書「野牛島・大塚遺跡」八田村文化財調査報告書第2集、p125., 八田村教育委員会

# 写 真 図 版



A区 全景



A区 土壌断面



A区 1号溝



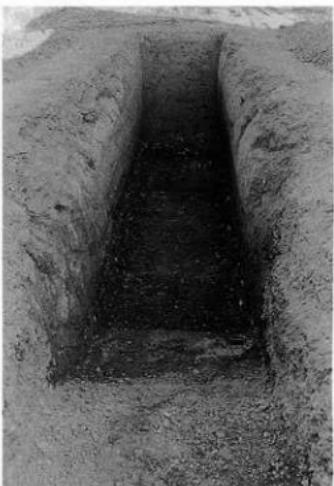
B-1区 全景



B-1区 調査風景



B-3区 調査風景



B-2区 全景



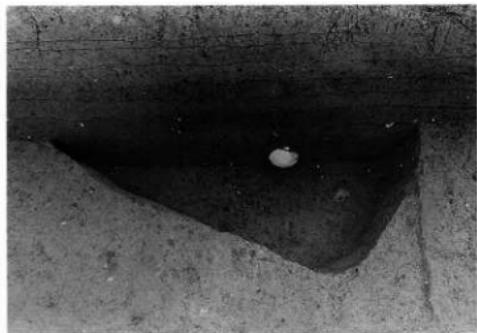
B-3区 1号溝



C区 全景



C区 1号溝



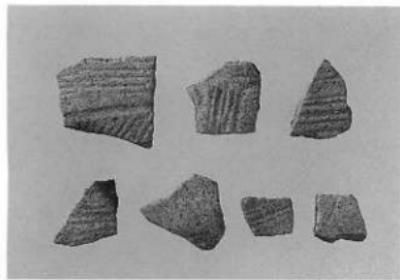
C区 1号住



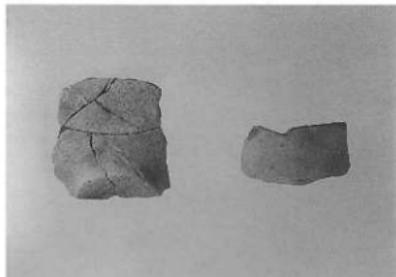
D区 全景



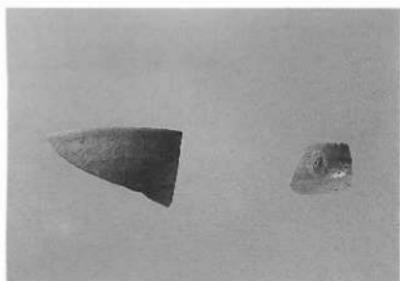
C区 1号住遺物検出状況



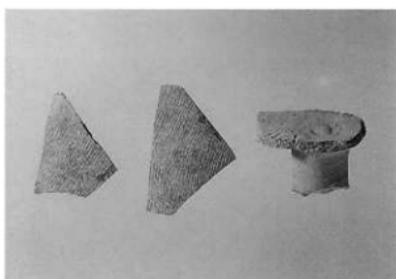
A区 出土遗物-1



A区 出土遗物-2



A·B区 出土遗物



C区 出土遗物

## 報告書抄録

ふりがな	やごしま・おおつかいせき
書名	野牛島・大塚遺跡
副書名	一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う発掘調査報告書
巻次	(全1冊)
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第203集
著者名	笠原みゆき
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL. 055-266-3016
発行者	山梨県教育委員会・国土交通省甲府工事事務所
発行日	2003年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野牛島・大塚遺跡	山梨県 中巨摩郡 八田村野牛島地内	19386	19	35° 40' 05"	138° 28' 31"	2001(H13)年 11月6日～ 12月12日	約500m <sup>2</sup>	一般国道52号線改築工事 に関する発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
野牛島・大塚遺跡	集落跡	弥生時代	溝	1	弥生土器片・炭化物	
		平安時代	竪穴住居跡	1	土師器・須恵器	
		近世以降	溝	1	陶磁器類	
		年代不明	Pit	14		

### 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第203集

2003年3月25日 印刷

2003年3月28日 発行

## 野牛島・大塚遺跡

—一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う発掘調査報告書—

**編集** 山梨県埋蔵文化財センター  
 山梨県東八代郡中道町下曾根923  
 TEL 055-266-3016  
**発行** 山梨県教育委員会  
 国土交通省甲府工事事務所  
**印刷** 株式会社少国民社

